



るあつらふ今さらの下路のあまを
おのほろともゆきつりつる鹿舞の
あつらふとて城松の志ほつらふ松葉の
あつらふとて松葉をこゝに連ねつるの集
法よりつらふとてあつらふのなをゆと
よとらんあつらふの松葉をこゝに
いそんとおのほろともゆきつる鹿舞の神の

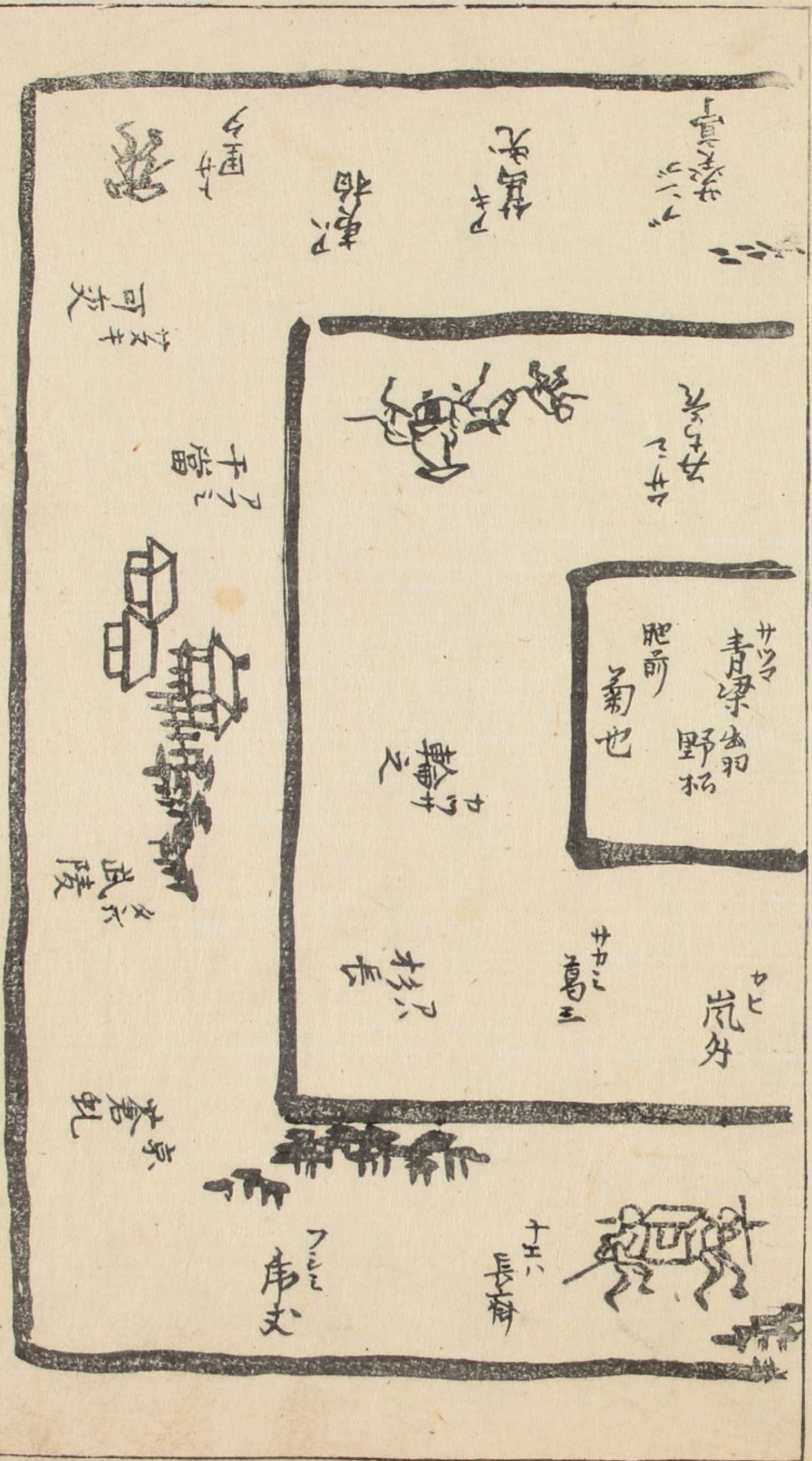
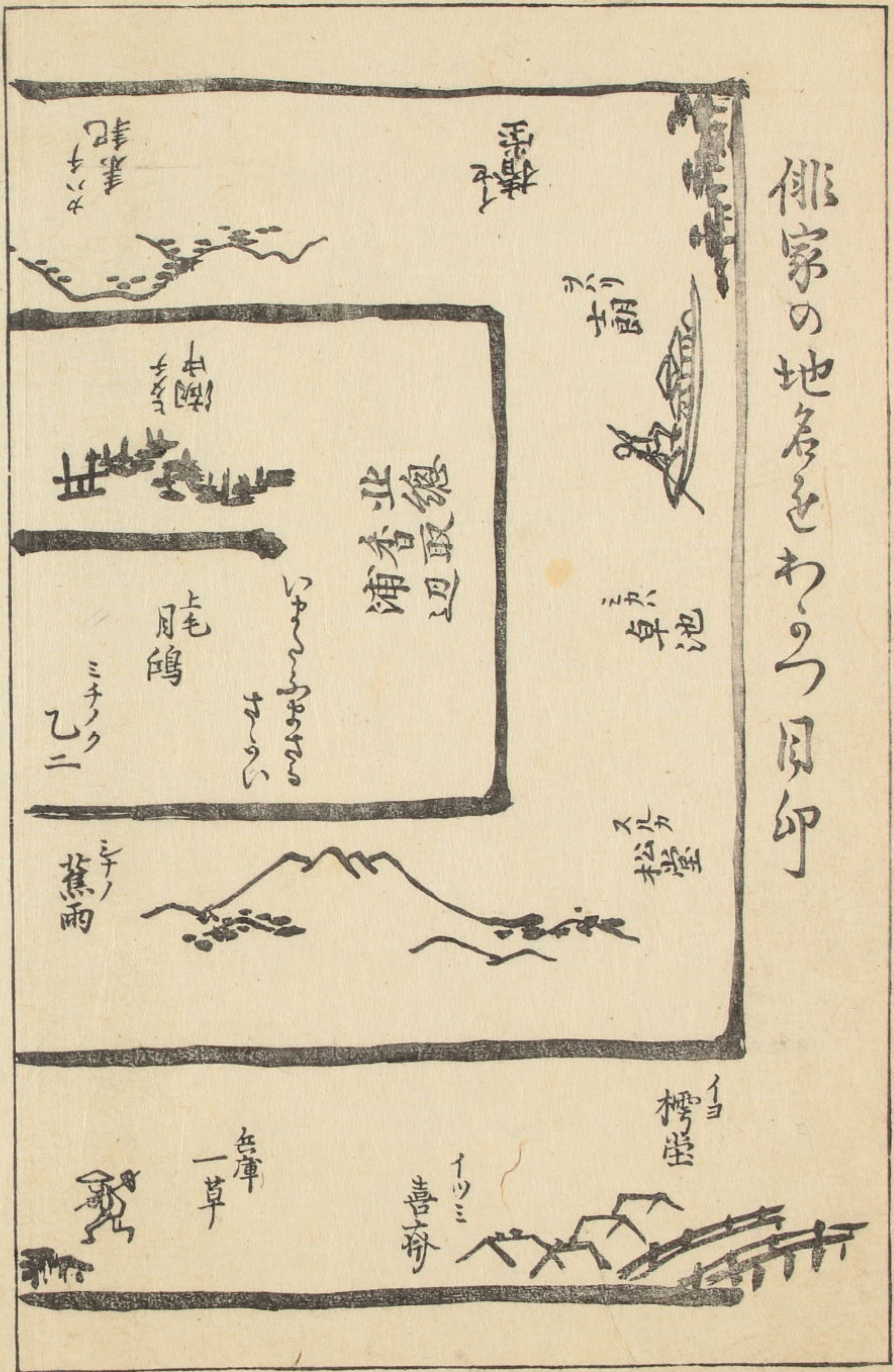
あつらふ松葉をこゝに連ねつるの集

あつらふ松葉

あつらふ

あつらふ
あつらふ

俳家の地名をわらう月印



秋香至大函圖

あつたつたにたつたる まちの寒く成 并六

浪元より都へけけけわさす

夕まよふときておあぬ 松衣 月居

あはあつたつたつたつたつた

きんちの得 ころるまあつた 席丈

そせ仲の気をもろむ入こし

ころに侍あさす

庭つらおつアんころかあつた 蒼虬

子規おそろしきとんざん山の鐘 玉屑

あつたつたつたつたつたつた 中 園叟

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた 其成

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた 居然

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた 雪雄

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた 武陵

月の影をいりて焼捨のふりまう
湖の苗代や 春の 鳥かゝる 千影

くもせしうしとあつらひのうしろあり

水きりもちもよもやうにせしうし 世の松 騏道

湖を穿てうりうりすまふとより 宇洋

喜物よれとく人の旨うれ 五来

むかひをよのむしうしよりあつらひ

ほろりも絶えぬのうし

あつらひふめとすきを吹散す心 烏頂

とえ祿の昔のえよのすきうし

出鞍の坂あちもの原うえ 仙風

月まはるを春のあつらひ 昔之

あつらひとせしあつらひ

いましうし

柳のまはるをよもやうにせしうし 亜溪

昔のまはるをよもやうにせしうし 志宇

長月あつらひと長よもやうにせしうし
くも心のあつらひはうし
信しうし

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a large initial letter 'S' and ending with a long horizontal flourish.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a large initial letter 'S' and ending with a long horizontal flourish.

渚のわが夜も一輪 嘆きあはせ 灞江

浪をき 沖より清き水 吟子を 秋化坊

唐の後の松より 雨をよき 松青

江流をばあはれ 子なきを 異年の秋

いづれをの卵をよき けしきよ けしきよ

をききも心うらむ かのつらさ 夷柏

暁のささくさく 降し 雪戸を 羅漢

夕雨あはれ 風多き みる子 滴水

さくらむけ 水もよき 金の尾 図留

いつせりにあはれ 橋のくしの月 蟻山

流るる水もよき 月を元の

よき水のよきを今も 月を元の

うちわのよきも けしき 門飾 篤老

ころりくもよき 終れ海をよき 月を元の

朝の風橋をよき 走つ ちやうり 葵亭

朝の風橋をよき 走つ ちやうり 有篁

あけのけ 朝の橋をよき 月化

あけのけの舟のよき 月を元の

あけのけの舟のよき 月を元の

あけのけの舟のよき 月を元の

一竿をいりてみよ 池邊をこゝろ

夢を 塙も 海の ありを 松の 月 兼紀

ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの

神よ ありて ありて ありて ありて ありて ありて

時ありて 内外の ことありて ありて ありて ありて

ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの

ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの

ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの

ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの

あつた 年の 暮遅く なるし なる 葉の 丘高

存念に 断ふらむ ちの ちの ちの ちの

あつた 年の 暮遅く なるし なる 葉の 丘高

月と ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの

あつた 年の 暮遅く なるし なる 葉の 丘高

あつた 年の 暮遅く なるし なる 葉の 丘高

ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの

あつた 年の 暮遅く なるし なる 葉の 丘高

あつた 年の 暮遅く なるし なる 葉の 丘高

あつた 年の 暮遅く なるし なる 葉の 丘高

あつた 年の 暮遅く なるし なる 葉の 丘高

岳 梅 五 竹
輅 間 雄 有

月あにさうらぬのちうんさるる 冬旦

下京や水鏡まらぬ母なるむね 護物

ほろりて来よりあはれはしめあはせ

子規のこゝろのあはれはしめあはせ

ちりしあめはつらき母を輝一の夢 成美

ちりしあめはつらき母を輝一の夢 一瓢

あはれはつらき母を輝一の夢 幽喃

初物也山の風情のこころは 諫圃

とほろりともほろりあはれはつらき母を輝一の夢 久熾

野のあはれはつらき母を輝一の夢 守静

月あにさうらぬのちうんさるる 菊池

春のあはれはつらき母を輝一の夢

あはれはつらき母を輝一の夢

春のあはれはつらき母を輝一の夢 清藻

楊柳のあはれはつらき母を輝一の夢

春のあはれはつらき母を輝一の夢 一茶

春のあはれはつらき母を輝一の夢 翠松

春のあはれはつらき母を輝一の夢 義輔

春のあはれはつらき母を輝一の夢

春のあはれはつらき母を輝一の夢 景兆

年村のきりもあまのめはるが
 多きおれ志同子切刺人あへ
 大津魚の陰見もあまの雨
 早草子よんこそ鳥りく紫
 野みよのるる舞の庵か瓜の志
 ゆりの入はよのほる 酔れ
 橋田川をくれんより一の夢
 小と鞠の花はうらりあへ
 猪もちうらよ鳥也すまき 刈

國村
 燕市
 松丈
 有圭
 春草
 斗月
 氷靴
 一雨
 三巴

五月雨のあまのめはるが
 ぬくまのあまのめはるが
 麻屋のさくく小川さくく
 朝かつおと人よよんこそ
 ちるもあまの月の袂をみるあか
 いよわい案やけ 次良いん即
 窓のあまのめはるが
 けりあまのめはるが
 茶のあまのめはるが
 茶のあまのめはるが

成美
 閑斎
 一茶
 美
 斎
 茶
 美
 幽嘯
 茶
 斎

ちるかたふふ茶かしの神もいしを
くふ 手し ちしむる 聖寺の鐘
中のかたふふとて厚あつり
温 銀のうしもいふ月夜こ
らちくと移下の袴かきゆる
瓦あふふかしの神もいしを
まらぬとてとてとてとてとて
山女あまのちかきうはりあり
古 銀のあふふとてとてとて
人よわらうとてとてとてとて

美 嘯 疾 茶 嘯 美 茶 疾 美 嘯

若うに暮るをいしとてとてとて
圃もいしとてとてとてとて
いよちかきとてとてとてとて
園、茶、花、をいしとてとて
柳のまた日鼻をいしとてとて
いさふとてとてとてとてとて
草やとてとてとてとてとて
花もとてとてとてとてとて
池やとてとてとてとてとて
あ、せふ、み、あ、れ、朝、鳥

茶 疾 美 嘯 疾 茶 嘯 美 茶 疾 美 嘯

仙頂禪師の仙を陸へりお同けり哉

砂にまきりい言はるるの書跡持しとせり

是れく空をもつ芥子のしとくは 五世 松江

杉の戸おし結々おのよりわたり 啓山

月を年一の欲もあらりまの山 三有

云よりも雨の葉梅老まぬし 得雨

刈一つのでくまをぬしお田の月 ト甲

ちく地志かろの薪ももしぬお子 雪守

言白齊村の記まの松介山のお

まの葉もや母のくちわぶ茎 由之

や桐抱けく松の尻もよのもの也 里石

雪まけのまよかろある山麓うれ 有美

おれまに残るもくあり睡月 古柎

まま花よふも初るを結雪く恋 雪搓

ままのちあまうまうぬまうま 知聲

あつてまよふおれあふぬ残ゆふ 鬼平

りまも入るのよあけよ水の月 一止

雪のありあるよおれれ寺 素溪

軍くくお羽おれ鷹の旗あふる 焦尾

人せらぬぬしも志さうわうれ電 雲翼

昔は海に白波のあふむまはるに
河のうらやまのこゝろにわさせぬ
たのしみあふむまはるに
たのしみあふむまはるに
うらやまのこゝろにわさせぬ
たのしみあふむまはるに
たのしみあふむまはるに
うらやまのこゝろにわさせぬ
たのしみあふむまはるに
たのしみあふむまはるに
うらやまのこゝろにわさせぬ
たのしみあふむまはるに

たのしみあふむまはるに
たのしみあふむまはるに
うらやまのこゝろにわさせぬ
たのしみあふむまはるに
たのしみあふむまはるに
うらやまのこゝろにわさせぬ
たのしみあふむまはるに
たのしみあふむまはるに
うらやまのこゝろにわさせぬ
たのしみあふむまはるに
たのしみあふむまはるに
うらやまのこゝろにわさせぬ
たのしみあふむまはるに

あまのこゝろ

あまのこゝろのなほく 陣の松 棋翠
あまのこゝろのなほく 陣の松 棋翠
あまのこゝろのなほく 陣の松 棋翠

朝暮のくもつこつける也武庫おら
傾城のあて入るこころよもれ山
あぐれとく子とあつてらん 蜀魂
佐藤きしあをさあけし星月相
曉也刺程あがりあしほもあは
松サアまかりて沸し二日月
風あたる何を雲の言とく 飛
老ぬきとん芒も人の 恋し一い
粟氣もあけさきし一 雲子 鳥
何とくあつてもあく抱込飲の陰

東騏 如翠 仙序 柳尾 梅曉 千足 秋左 唯我 玉我 荒文

二つあまのより一花とあがりぬふの月
ゆるまををゆもあし一や本免のつら
まの雨もあつてらんさる靴もあ軍
ちとんとてあつて一もあつて初櫻
あつてあつて山もあつてあつて言ん
筆の香かうもあつてあつてあつて
十月もあつてもあつてあつてあつて
初もあつてもあつてあつてあつて
あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても

豊玉 樵月 鱗々 春水 李益 雪悟 青岱 皎月 惟平 三顧

初まあむまのともりわが為あすの
 青郊
 空も梅も花の露——馬具四
 菅美
 石を食むはくわ村の雨の松
 菅教
 字の法有よまのあつてせんりち根
 橋堂
 中の戸の地味はうり北十五日
 石鯉
 朝うけち木賊のこけ松の風
 蒼山
 庭の庭の音もまのまき——あなれ
 蓬只
 あつてまの食むあつて——深山哉
 馬逸
 都もも新のうちの竹もまのまき
 魯民
 梅もも花の露もも花の露もも
 白兔

空も梅の露もあつて——中の菴
 文雄
 夕もあつてのけ——あつてのけ
 眉岳
 浪もも花の露もも花の露もも
 蜀桺
 竹もも花の露もも花の露もも
 竹栗
 梅もも花の露もも花の露もも
 魯水

三の節の浦

其もも花の露もも花の露もも
 雙樹
 梅もも花の露もも花の露もも
 坊
 濁もも花の露もも花の露もも
 道明
 空もも花の露もも花の露もも
 月船

あはれおのめいしはうむそのま 鉢入

梅の海

山は水はゆふのまのあはれまにし 古え

ひさし那を鳴るはけり月の人 吟水

酔さめも解るはかゝる山の縁 古彦

成田山

四條の納涼

かき川よつとけり也 心太 素迪

水はまのよらけりあはれ梅の心 一長

まの編の御ふはけり天の川 至長

大なるきりしはもまの梅の在 芸堂

霧を梅も何れは葉もけり人の知 竹加

人のまてまの梅のけり梅の心 大雲

志は梅よけりはけり月 山路

梅の葉は人まの梅の心 胡蝶

ふのまの梅

ふのまの梅の心はけり月 雨塘

ふのまの梅の心はけり月 之經

梅の心はけり月

ふのまの梅の心はけり月 對竹

細道 遺稿 繫橋 一冊

巴刻

蕉翁 獨吟 五歌 儂考 一冊

刻成

六日 菖蒲 二冊 立圃翁文集

近刻

七との 清水 二冊 一柞梨一著

近刻

江戸馬喰町二丁目 永壽堂

西村屋與八板

大坂心齋橋唐物町 文金堂

河内屋太助板

